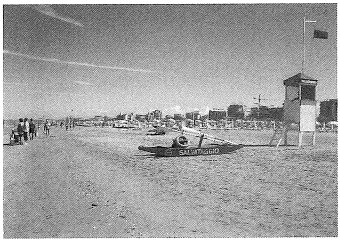
海外レポート

イタリア保育 おもいきって 参観記（1）

「ノストロ プロジェット」エミリアロマーニャ州リミニ市

金澤妙子

勤務先の海外長期研修制度で、私は今、イタリア・エミリアロマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間の予定で滞在している。七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけである。本連載ではリミニ市を中心に、他市の保育も紹介していく。

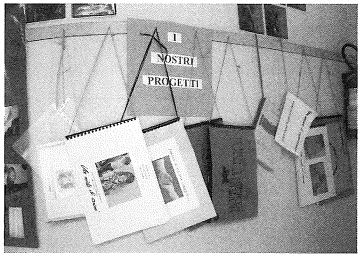


NOSTRO PROGETTO（ノストロ プロジェット）の厚み そこかしこから

前回の研修は十一月～三月末であった。「もう帰るのね、イタリアはこれからいい季節になるのに……」。保育者はそう言った。晩秋からの保育は、室内の活動がほとんどだった。いい季節の庭での遊びも見てみたい、毎日少しずつやっているこの劇活動（プロジェット）はどんなふうになるのだろうか。そう思って帰国した。

念願かなって、四月早々現場に入ると、クラス内の壁面やコーナーはもとより、玄関、共有スペースなど園内の各所に保育の様子がドキュメンテーショ

ン化されている。保育園（3～32か月）の入口すぐのホールの壁に、過年度のプロジェクト（英語の「プロジェクト」に近い。大きな目標を集団で実行するための計画、及びそれを実現するための仕事の実行までを含めて指すこともある）を写真と簡単な文章でつづった冊子が掛けてあるコーナーがあり（**右の写真**）、お迎えの保護者がのんびりと繰っていた。

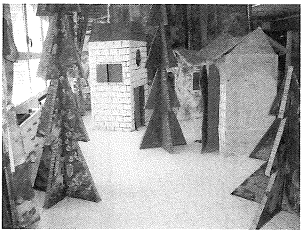


ここリミニはアドリア海側のリゾート地、園から海まで二、三分という立地からだろう、「海を体験する」という年があったようだ。保育者の読む絵本に見入る子どもたち、青い箱から取り出された貝殻、それで遊ぶ子どもたち。大きめの紙を前に三人の二歳児が刷毛（はけ）や手で白い糊（のり）をつけ、砂を落とす、フィンガーペインティングで魚に色をつける、ローラーや手で白い紙を水色にする。部屋に黒いビニールシートを広げ、各自洗面器に入れてもらった砂を落として遊ぶ。塩をなめる。青いシートの上に砂を敷き詰め貝殻などを置き、水色に塗った用紙に魚や海草を描いて海の中を表現した紙を周囲に巡らせた部屋で、はだしで遊ぶ子どもたち（園に砂場はない）。

九月半ばに始まり六月末に終わる学校暦の四月は、日本の三学期。集大成の時期にポンと入った私には、積み重ねられた保育の日々が覆いかぶさってきた感じであった。

幼稚園の場合 ～物語る～

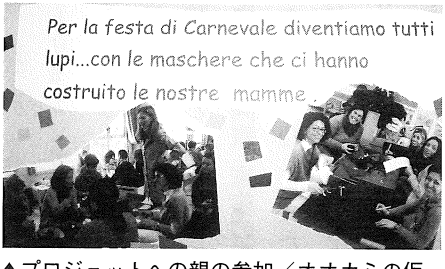
園内に足を踏み入れた途端、ここにはケモノが住んでいると思われる足跡。壁には『オオカミのこと知ってました？……』と題された「狼」情報のコーナー、続く共有スペースには、森と、子どもが入れる段ボールの家。



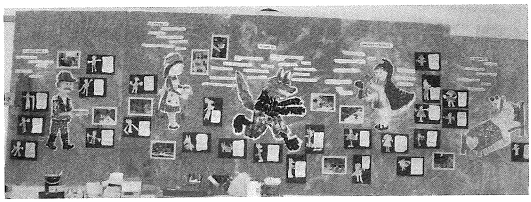
この園には、保育園と幼稚園のつながりに配慮して、保育園の最終クラス（27～36か月）が一つある。「物語る」というプロジェットのもと、取り上げた題材は、保育園クラス「三匹の子ぶた」、三歳児クラス「赤ずきんちゃん」、四歳児クラス「オオカミおじさん」という当地に昔からあるお話。オオカミが子どもを食べてしまうので、子どもが怖がらないように少しアレンジしたそうだ。五歳児クラスが「オオカミと七匹の子やぎ」。オオカミが共通する。

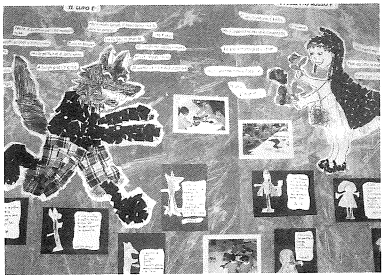
四歳児クラスの壁面には、「ある朝幼稚園に着くと、奇妙な足跡と、色とりどりに塗られた四つの小さな家を見つけたよ。そしてその周りを、重い旅行カバンに変身した愉快なオオカミが、ぐるぐる周っていたよ」**（上の写真）**。語りは、こんなふうに園に具体的に登場し、カーニバルの日にはみんなでオオカミに変身する。変身の仮面はママが園で作ってくれたものだ。ある園児の母親がオオカミのメーキャップをしに来てくれ、オオカミになりきって遊び、みんなで赤ずきんちゃんの劇も見た。

部屋の一角にはワインを集めたenoteca（酒屋）をもじった造語で『LUPOTECA』というコーナー。絵本をはじめlupo（オオカミ）関連のものを集めている。〝オオカミ屋さん〟といったところだ。lupotecaなんてイタリア語はない。だが、ユーモラスでしゃれた、センスのいいコーナーの提案の仕方だなと思った。子どもたちの描くオオカミはとてもすてきなものだった。



▲プロジェットへの親の参加／オオカミの仮面作り（壁面のドキュメンテーションより）





▲右の写真の部分を拡大

三歳児クラスでは「赤ずきんちゃん」の絵本は一切見せなかったそうだ。語りを繰り返した後、「狩人はどんな人？」と聞き、かっこいい、髪とひげがある、帽子をかぶっている、チョッキを着ている、鉄砲を持っているなど、登場人物に対する子どものイメージを言葉として引き出す段階があり、保育者が布や毛糸やボタン、さまざまな素材の紙、絵の具などを用意し子どもと一緒に描いたものが上の写真である。随所に、描いた時の子どもの様子を写真で示し、子どもが描いた登場人物と、それについての子どもの言葉を漫画の吹き出しのようにしてある。お迎えの保護者がこうしたドキュメンテーションを見て話題にしている姿もあった。

コーディナトリーチェからの聞き取りで

幼稚園・保育園ともに全クラスの参観を一通り終えたかという五月、現場での話し合いをもった。リミニ市の公立園には、コーディナメント部署に所属する人（Coordinatrice（コーディナトリーチェ））が、市役所から上司・調整役（一人が約8園を担当）として回って来る。「あなた方の保育の中でプロジェットは一番大事なものですか」と聞くと、「違います。人に説明するのは、難しいのよね」と言いながら、以下のように続いた。

――ロシアの人形（マトリョーシカ）のように入れ子になった三つの箱をイメージしてください。

一番目の箱：**〈日常的なしつけ・一番大きくて重要〉**

生活習慣を繰り返し確認することで、自律を促す。

二番目の箱：**〈園生活全体における両親・家族の参加〉**

親と一緒に子どもを育てていく。むしろ私たちは両親を助ける存在で、それが子どものためにもなる。例えば、あいさつはひとりでできるか、両親や先生の援助が一番必要な時はどんな時か、どんな形で援

助すればいいのかなど、近年、両親もわかってきた。

三番目の箱：〈プロジェット〉

子どもと作っていくが、保育者から子どもに贈る宝物。ベースはあるが、毎年変わる。年度が始まって子どもや両親を観察しながら、どういうものにするのか十二月いっぱいに決定。一月ごろから始める。

私たちは自分たちがやっていることを記録に残す。そうすることでいつも取り出して見（せ）ることができる。自分のやっていることを人に話すことができるように、また両親に見せるためでもある。両親は、ここで何が行われているか見えていない。保育者にとってもプロジェットがどういうふうに生まれ、進み、どう修正したか。なぜ今こういうことをやるのかということを確認することになる。――

NOSTRO PROGETTO（ノストロ プロジェット）とは、この一年この子たちと何ができるか、残せるかと考えた、「私たちの『試み』」なのだと感じた。開始後、子どもの様子で修正することはあっても、中止や全く別のものにすることはないという。在園児の年齢幅を考えると、園全体で取り組むのは、大き過ぎはしないかという気もして聞いたのだが、参観していると、さまざまなアプローチで体験したストーリーとオオカミはじめ登場人物のモチーフは、子どもの中に、そして園全体にも浸透していた。誰かのちょっときっかけになる動きでそこにいる人たちが呼応していくような積み重ねを、保育者と子どもとの間に、また親の中にも感じた。テーマ決定まで三か月、遂行に半年かける。各クラスで繰り返して楽しんだテーマは年度末には「Progetto Didattico（プロジェット ディダティコ）（教育プロジェクト）：オオカミの話」（四歳児の場合）というタイトルの冊子にまとめられ、子どもと両親のもとに届けられた。

「これは私たち（リミニ市公立）のやり方よ」と言うコーディナトリーチェの言葉で、私が前回の研修で訪れたボローニャ市では、入園後三年間（担任固定）のスパンで考えていて、主には五歳児クラスで複数取り組んでいたことを思い出した。―次号に続く―

（大東文化大学／イタリア リミニ市滞在）